

ロシア―「全人性」の母なる大地

―池田大作先生のソ連・ロシア観―

宮 川 真 一

はじめに

1. 日本人のソ連・ロシア観
2. ロシア文学の深遠
3. ロシア思想の葛藤
4. ソビエト連邦の悲劇
5. ペレストロイカの英断
6. ロシア人民の「全人性」

むすび

はじめに

「宗教者が共産主義の国にどうして行くのか」。非難中傷が渦巻く中、創立者池田大作先生はソビエト連邦にその第一歩を印された。1974年9月8日のことである。「そこに同じ人間がいるから行くのです」。この信念から池田先生は、1994年までにソ連・ロシアを6度訪問される。両国の懸け橋となって友好の道を切り拓いてこられた。今やロシアは国を挙げて池田先生の思想と行動を顕彰する。モスクワ大学における2度の記念講演。歴代総長たちと4点の対談集を刊行。同大学の名誉博士を初め、16の名誉学術称号と12の顕彰が池田先生に贈られている。「SGI会長 池田大作写真展―わが宇宙」。国を代表する文化人たちとの対談集は3点に。ロシア芸術アカデミー「名誉会員」を初め、文化・芸術機関は5つの栄誉を贈った。「核兵器―現代世界の脅威」展でのスピーチ。歴代の首相や大統領と会見し、対談集1点を出版。ロシア連邦「友好勲章」を初め、行政機関からの顕彰は10を数える¹⁾。池田先生は「日ソ・日ロ関係の第一人者」と言えるだろう。

1996年には『20世紀の精神の教訓』と題し、元ソ連大統領でノーベル平和賞受賞者ミハイル・ゴルバチョフ氏との対談集が刊行されている。その中で池田先生は、「いま世界が、これだけボーダーレスの時代になっても、貴国と日本は、隣国でありながら遠い国というのが、両国民の率直な印象ではないでしょうか。／あなたは、1991年4月、ソ連の国家元首として、初めて訪日されました。そのとき、『お互いの国民が歩み寄るスピードが速まってゆけば、新しい形態の協力が可能に

表1 池田先生とロシア識者との対談集

| | 対談者 | 書名 | 出版社 | 出版年 |
|---|---|----------------------------|-------|----------------|
| 1 | アナトーリ・A・ログノフ (モスクワ大学総長, 世界的物理学者) | 第三の虹の橋 —人間と平和の探求— | 毎日新聞社 | 1987年 |
| 2 | C・アイトマートフ (現代ロシア文学を代表する作家の1人) | 大いなる魂の詩 (上) (下) | 読売新聞社 | 1991年 1992年 |
| 3 | アナトーリ・A・ログノフ (モスクワ大学総長, 世界的物理学者) | 科学と宗教 (上) (下) | 潮出版社 | 1994年 1994年 |
| 4 | ミハイル・S・ゴルバチョフ (元ソ連大統領, ノーベル平和賞受賞者) | 20世紀の精神の教訓 (上) (下) | 潮出版社 | 1996年 1996年 |
| 5 | A・リハーノフ (国際児童基金総裁, 児童文学者) | 子どもの世界 —青少年に贈る哲学 | 第三文明社 | 1998年 |
| 6 | ヴィクトル・A・サドーヴニチ (モスクワ大学総長, 世界的数学者) | 新しき人類を 新しき世界を —教育と社会を語る | 潮出版社 | 2002年 |
| 7 | ヴィクトル・A・サドーヴニチ (モスクワ大学総長, 世界的数学者) | 学は光 —文明と教育の未来を語る | 潮出版社 | 2004年 |
| 8 | アレクサンドル・セレプロフ (全ロシア宇宙青少年団「ソユーズ」会長, 宇宙飛行士) | 宇宙と地球と人間 | 潮出版社 | 2004年 |

※対談者の肩書きは対談当時のものである。

なり、深い信頼と友情を育んでいけるものです』と私に語ってくださったことを覚えています。／長年、両国の繁栄のため、民衆の交流が促進されることを望んでいた一人として、まったく同感です。私は、この対談が、そうした相互理解の一助になればと願ってやみません²⁾と述べられている。

「池田先生とソ連・ロシア」というテーマの中で、本稿は池田先生のソ連・ロシア観を明らかにしようとするものである。池田先生はこれまでさまざまな機会を通じてソ連・ロシアに言及されてきた。例えば、モスクワ大学での記念講演、「SGIの日」記念提言、ロシア識者との語らい、会合でのスピーチやメッセージなどである。ここでは、池田先生とソ連・ロシア識者との対談集を素材として取り上げることにする。これら8点にのぼる対談集では表1のように、さまざまな背景を持つ6人の対談者と多彩な話題が論じられている。最初の対談集は1987年に出版されたログノフ対談であり、最新の対談集は2004年に刊行されたセレプロフ対談である。この時期にはベレストロイカが開始され、ソ連が消滅し、新生ロシアが誕生するという、この国の歴史を左右するような出来事が押し寄せていた。その随所でソ連・ロシアが話題となるこれらの書には、池田先生のソ連・ロシア観が凝縮されていると考えられる。本稿ではまず、これまで日本人が抱いてきたソ連・ロシア観を検討する。次いで、これら対談集における池田先生のソ連・ロシアに関する発言を抽出し分析することで、池田先生のソ連・ロシア観の全体像が明らかになり、その特徴

を理解することができるだろう。

1. 日本人のソ連・ロシア観

木村明生氏は日本人のソ連・ロシア観を次のように整理している。まず、日本人の帝政ロシア観については、「警戒と尊敬」であるという。ロシアの探検船や軍艦が日本の北辺に出没し始めた18世紀後半は、ピョートル1世からエカチェリーナ2世にかけてロシアが東方に進出した時代であり、日本が鎖国政策を採っていた江戸時代後期に当たる。当時の日本の知識層には、ロシアが南下するのではないかという警戒感と、近代ロシアのめざましい発展ぶりに対する尊敬の念とが混じり合っていた。林子平は『海国兵談』という書物を刊行して、海岸に砲台を築き軍船を建造するなど海防を嚴重にするよう主張した。一方、ピョートル、エカチェリーナら英明な君主を戴くロシア帝国の内外における発展を賛美し尊敬する感情も認められた。ロシアに滞在した大黒屋光太夫の見聞録では、ロシアが肯定的に描かれている。19世紀に入ってロシアが執拗に通商を求めるとともに、ロシアの軍艦が一時対馬を占領するに及んで、対ロ警戒論は現実味を帯びてきた。民衆は当時のロシアの呼び方「オロシヤ」をもじって「おそろしや」と呼んだ。ロシアがシベリア鉄道を起工し、アジア進出の姿勢を見せたことから、対ロ警戒心は一層強まった。ロシアが東洋に進出するにつれて、日本人は反発を強め、「ロシア憎し」「ロシア討つべし」の感情を昂ぶらせた。そして、20世紀初頭に日露戦争が勃発した。しかしこの戦争の後、日本に紹介された19世紀ロシア文学は日本の文学者や知識人に大きな影響を与えた。ドストエフスキー、トルストイ、ツルゲーネフの作品が島崎藤村、田山花袋らにも影響を与えている³⁾。

1917年のロシア革命で帝政ロシアは消滅し、世界初の社会主義国ソ連が生まれた。このまったく新しい隣国の出現に日本人はとまどった。それから70余年、木村氏によれば、日本人のソ連観は「恐怖」と「あこがれ」の両極に分かれてきた。資本主義列強はソ連に脅威を感じ、武力に訴えてでもこの若い危険な国家を押さえ込もうとした。日本ではとくに支配層の間にソ連脅威論が高まった。それとは裏腹に、日本のインテリの間には依然としてロシア・ソ連の文学や芸術に対するあこがれの念があった。文学作品が続々と翻訳され、主要作品はほとんど日本語で読めるようになった。さらにソ連の社会主義そのものに対する知識層の関心も高く、マルクス、レーニンらの著作も刊行された。第二次大戦後、日本人のソ連観ははっきり反ソと親ソ、ソ連脅威論とソ連肯定論とに分かれた。60年代に入ってソ連と中国との間にイデオロギー論争が始まると、日本のジャーナリズムにはソ連否定論が高まってきた。70年代から80年代半ばにかけて、日本ではもっぱらソ連の脅威を説く書物の刊行が目立った。表2・表3・表4は、当時の世論を示している。1980年代の半ば以降、ゴルバチョフ政権が「ペレストロイカ」政策を打ち出し、「新思考外交」を推進して西側諸国との協調をはかるようになり、日本人の対ソ感情も好転した⁴⁾。

表2 近隣諸国に対する親しみ (1983年6月)

| | アメリカ | ソ連 | 中国 | 韓国 |
|-------------------|-------|-------|-------|-------|
| 親しみを感じる | 28.2% | 1.3% | 20.8% | 7.6% |
| どちらかというとき親しみを感じる | 43.7% | 7.6% | 51.7% | 31.4% |
| どちらかというとき親しみを感ぜない | 16.5% | 36.8% | 14.1% | 34.6% |
| 親しみを感ぜない | 6.1% | 45.5% | 5.7% | 15.8% |
| わからない | 5.4% | 8.8% | 7.8% | 10.5% |

出所：「外交に関する世論調査」〔内閣総理大臣官房広報室，1983年6月，全国20歳以上の者2317人（77.2%）個別面接法〕内閣総理大臣官房広報室編『全国世論調査の現況：昭和59年版』内閣総理大臣官房広報室，1985年，105ページ。

表3 ソ連という国の印象 (1983年12月)

| | | | |
|--------|-------|-----------|------|
| 軍事大国 | 77.2% | 工業の進んだ国 | 5.7% |
| 独裁国家 | 57.3% | 民主主義的な国 | 3.3% |
| 官僚の国 | 17.1% | 平和国家 | 2.1% |
| 勤労者の国 | 12.0% | わからない・無回答 | 6.3% |
| 遅れた農業国 | 7.8% | | |

出所：「オリンピック，日本人のソ連観，内閣・政党支持に関する世論調査」〔(株)共同通信社，1983年12月，全国20歳以上の者2140人（71.3%）個別面接法〕同上書，495～496ページ。

表4 ソ連国民の性格2つまで (1983年12月)

| | | | |
|----------|-------|-----------|-------|
| 暗い | 45.1% | 誠実である | 7.2% |
| ずるい | 44.7% | 明るい | 4.4% |
| 乱暴なことをする | 29.8% | 思いやりがある | 2.8% |
| 人が悪い | 20.7% | わからない・無回答 | 14.8% |
| 人がよい | 9.3% | | |

出所：同上，496ページ。

表5 ロシアについての印象 (1999年10月)

| | | | |
|-------------|-----|----------|----|
| 経済が混乱している | 27% | 資源が豊か | 5% |
| 信用できない | 20% | スポーツが強い | 5% |
| 政治が安定していない | 17% | おおらかな国民性 | 3% |
| 強大な軍事力 | 9% | その他・答えない | 8% |
| 文化・芸術が優れている | 6% | | |

出所：「日ロ意識・脳死と臓器移植」に関する世論調査〔朝日新聞社、1999年10月、全国有権者3000人、2229人（74.3%）個別面接聴取法〕内閣総理大臣官房広報室編『全国世論調査の現況：平成11年版〕内閣総理大臣官房広報室、2000年、439ページ。

表6 好きな国3つまで (2007年1月)

| | | | |
|------|-------|----------|-------|
| スイス | 41.0% | インド | 4.9% |
| アメリカ | 36.6% | 中国 | 4.9% |
| イギリス | 36.6% | ロシア | 1.2% |
| フランス | 35.3% | 北朝鮮 | — |
| ドイツ | 22.2% | ない・わからない | 25.8% |
| 韓国 | 6.4% | | |

出所：「時事世論調査」〔時事通信社、2007年1月、全国20歳以上の男女個人2000人、1367人（68.4%）個別面接聴取法〕内閣府大臣官房政府広報室編『全国世論調査の現況：平成19年版〕内閣府大臣官房政府広報室、2008年、588ページ。

1992年末、ソ連は崩壊し、新生ロシアは共産主義を放棄して市場経済と民主主義をめざしてスタートした。これにより、ロシアと日本の間で価値観の対立がなくなったという認識が日本人の中に生まれた。日本人はようやくロシアを、価値観を共有する“普通の国”と見ることができるようになったと木村氏は述べている⁵⁾。しかしながら表5・表6を見る限り、日本ではかつての対ロ警戒論もまた復活しているように思われる。

2. ロシア文学の深遠

かつて日本人にとってロシア文学はとても身近なものだった。世界文学全集には必ずロシアの長編小説が含まれていて、文学青年たちは懸命に読んだものである。そこでは登場人物たちが長い議論を戦わせ、哲学的なテーマについての主張が織り

込まれる。そうした面白さや深い思想性などの点で、ロシア文学を代表する作家はドストエフスキーとトルストイであろう。11世紀以来のロシア文学の歴史にも優れた作品はある。しかし19世紀以前には、シェイクスピアやダンテといった普遍性を持つ作家は見当たらない。19世紀に入ってからが発達が目覚し、才能の集中度はロシア文学の特徴である。プーシキンからチェーホフまで大作家たちが次々に生まれ、ロシア文学は世界最高のレベルに達した⁶⁾。

池田先生はロシア文学を高く評価し、次のように語っている。「日本人はロシア文学を深く愛好してきました。プーシキン、トルストイ、ドストエフスキー、ゴーリキー、チェーホフ、ツルゲーネフといった文豪の名前は多くの人が知っていますし、『戦争と平和』『カラマーゾフの兄弟』その他の作品は相当多くの人に愛読されています。チェーホフ生誕100年、ドストエフスキー没後100年は日本でも、各地でさまざまな記念の催しが行われました」⁷⁾。池田先生によれば「ロシア文学の人間洞察は、比類なく深い。常に大きな示唆を与えてくれ」⁸⁾る。とりわけトルストイやドストエフスキーが愛読されているのは、それらの作品が「人間性を深く掘り下げ、見事に表現している」⁹⁾からである。

池田先生が取り上げる19世紀ロシアの作家・詩人は、トルストイ、ドストエフスキー、ゴゴリ、ゴーリキー、チェーホフ、プーシキン、チュッチェフらである。ソ連時代の作家では、パステルナーク、ルイバコフ、プーニン、グロスマン、ソルジェニツィン、アイトマトフ、リハーノフとなる。中でもトルストイは池田先生が「若い頃から愛読し、敬愛してやまない大作家である」¹⁰⁾。その作品では、『戦争と平和』『アンナ・カレーニナ』『イワン・イリイチの死』『コサック』『幼年時代』『アッシリア王アッサルハドーン』『ハジ・ムラート』『クロイツェル・ソナタ』が話題となっている。

こうしたトルストイの作品の中で、『戦争と平和』には次のようにたびたび触れている。「トルストイの名作『戦争と平和』に出てくる……カラターエフは、ロシアの農民に流れている美質を、一身に体現したような典型的な庶民像として描き出されており、登場回数は少ないにもかかわらず、鮮烈な印象を残します。いうまでもなく、作者のトルストイが、プラトン・カラターエフに、英雄ナポレオンにも勝る、人間の英雄像を仮託していたからです。／共にフランス軍の捕虜になった主人公ピエールに、この無名の一農民は、忘れ難い印象を刻みます。『戦争と平和』の中でも、最も印象的な描写の一つです。……プラトン・カラターエフは、トルストイ晩年の“悪に抵抗するな”という無抵抗主義、非暴力主義の先駆けともいうべき存在で」¹¹⁾ある。「トルストイの『戦争と平和』は、そうした英雄としてのナポレオン像を打ち砕き、英雄像にまといついているさまざまな世俗的価値の矮小さを暴き出し、もって宗教的価値との勝劣の大転換をうながそうとしたものでした。名作に描かれるナポレオン像と、無名の一農民プラトン・カラターエフ像との鮮やかすぎるコントラストは、トルストイの志向したところをよく物語っております」¹²⁾。

また、『アンナ・カレーニナ』からも以下のように数々の引用がなされている。「『アンナ・カレーニナ』のレーヴィンに象徴されるように、ロシア文学は善良で純

朴で本然的な平和主義者としか言いようがない魅力ある農民像を数多く残していますが、民衆感情という土壌、ロシアの大地には平和への本然的な希求が息づいていると推察しているのです」¹³⁾。「トルストイが『アンナ・カレーニナ』の終章で、主人公レーヴィンの口を借りて、人間を矮小化させる現代文明の病理を鋭く批判しているのも、『共生』感覚の喪失ということと、通底しているのではないでしょうか」¹⁴⁾。

対談集ではドストエフスキーに関する言及も多い。『カラマーゾフの兄弟』『悪霊』『罪と罰』『死の家の記録』といった作品が取り上げられている。中でも最も多く話題となっているのが『カラマーゾフの兄弟』である。イワン・カラマーゾフは、教養ある紳士、淑女が子どもに対してどれほど残酷な行為に及ぶかを列挙する。人間は野獣以上に残酷であると述べていることに関し、池田先生はこう語る。「いわゆる二重人格ですね。イワン・カラマーゾフがやり玉にあげている例—5つになる女の子がちょっとした粗相をしたのをとがめ、死ぬほどの折檻を加え、嗜虐的な快感にひたっているような、『教養ある紳士、淑女』である両親など、その典型です」¹⁵⁾。その一方で、「飲んだくれの好色漢のように見えながら、魂の奥には、無垢な美質を秘めている—たとえば、ドミートリー・カラマーゾフのような人間群像を描き出している点では、ロシア文学は、世界に冠絶しているでしょう」¹⁶⁾と述べている。

ドストエフスキーの作品では『悪霊』もしばしば取り上げられている。「レミングという小動物は、集団をつくって大移動します。途中、野を越え山を越え、植物を食べ荒らしながら一直線に行進し、海岸に到着するとそのまま海中になだれこみ、集団で溺死してしまう、といいます。／周知のようにドストエフスキーは、『悪霊』のなかで、宗教的規範を喪失し、エゴイズムという悪霊にとりつかれた人々の動態を、このレミングのイメージに仮託して、不気味に描き出しました」¹⁷⁾。また、ニーチェが社会主義社会における国家や権力の悪に対して深く洞察したことに関し、こう語っている。「これはドストエフスキーにとって、社会主義とは第一義的に無神論の問題であったことと、同じ質の深さをもった問題です。その洞察の深さゆえに、ドストエフスキーは『悪霊』が典型的に示しているように、社会主義の未来について驚くほどの確に予見することが可能となったのです。そこに、“ロシア革命の鏡としてのトルストイ”を超えて“ロシア革命の予言者としてのドストエフスキー”といわれるのも、ゆえなきことではありません。ニーチェが『悪霊』のキリーロフに、異常なまでの興味と親近感をもっていたことは、日本でもよく知られています」¹⁸⁾。

3. ロシア思想の葛藤

17世紀末のロシアでは、ときの皇帝であるピョートル大帝が全面的な西欧化政策に踏み切っている。「ロシアの精神風土には、自らを律していく市民意識が、伝統的に希薄であったとされています。いきおい、リーダーシップのあり方も、知識

を与え、教え導くといった、よくいえば啓蒙的、悪くいえば強権的性格を帯びてこざるをえない。そのジレンマを典型的に体现していたのが、言うまでもなく、「啓蒙君主」ピョートル大帝でした」¹⁹⁾。こう池田先生が述べるように、ピョートル大帝の改革は性急かつ強引なものであった。

西欧文明を大幅に受け入れざるをえなくなった文明に、やがて西欧派と土着派が生まれてくる。西欧派のことを国際派、土着派のことを民族派といってもよい。西欧派は、西欧化をすすめて西欧に近づこうとする。西欧に基準をおき、その基準で土着を批判する。西欧化が進み、土着の文明の解体が意識され始めると、西欧化に対する反省や抵抗として、土着派が生まれる。この土着派の出現は、その文明が発信するSOSとみなすことができる。このままでは西欧になり切ってしまい、土着文明が消滅してしまうからである。ロシアの150年におよぶ無自覚な西欧化を初めて根本的に自覚させたのが、1836年に発表されたチャダーエフの『哲学書簡』である。この論文は「ロシアとは何か」を主題とし、ナショナル・アイデンティティの問題をロシアに突きつけた。そして1840年代には西欧派とスラブ派という2つの思想潮流が生まれ、両者の間で論争が起こるのである。西欧派とスラブ派が出揃ってから、ロシアは絶え間ない分裂状態に置かれた。ロシア人とは何者か、ロシアの民族的特殊性とは何か、ロシアの世界における使命とは何かが問われ続けてきた²⁰⁾。

ロシア思想史における西欧派とスラブ派の論争について、池田先生は次のように述べている。「貴国において、伝統と近代化というこの思想的・文明史的課題が激しく問われたことは、日本人に親しまれているロシア文学にも反映しているようです。それが、1830～40年代に起こったスラブ派と西欧派との論争であったといえると思います。／スラブ派は土俗的伝統主義であり、西欧派は近代的改革を推進しようとした派です。ロシアをビザンチンの正統者として“第三のローマ”に見立てた16世紀の思潮を引く伝統派の、過度のメシアニズム……は、私達日本人には、とうてい理解しがたいものがありますが、それはともあれこの両者の対立のうちでは、西欧派の中でもベリンスキーやゲルツェンらの革命的民主主義がロシア革命につながっていったといえますが、19世紀末から20世紀初頭における革命指導者の中から伝統派が台頭し、むしろこちらが主導権を握るにいたります。革命後、トロツキーのような極端な西欧派が敗れ去ったのが、その象徴といえましょう。私が考えますには、レーニンやスターリンははるかにロシアの土俗性を重んじた、あるいは、彼ら自身の内に土俗性を体现していたといえるようです。レーニンが『我々は民族的誇りの感情で一杯だからこそ、農奴制の過去を憎むのだ』といったことはあまりにも有名です」²¹⁾。

池田先生がスラブ派と西欧派との論争に興味をもつ理由は、「スラブ派の論調に多くの欠陥はあるにしても、彼らが一様に、ロシア古来の農村共同体を称賛しているからです。善良で信仰心が厚く、裕福なロシアの農民像は、多くのロシアの作家が好んで取り上げたところでもありました。ある日本の識者は、こうしたロシアの伝統を指摘して『ロシア人は、看板にいつわりなく、平和を愛好する民族である』

と述べております。事実、現在のソ連を訪れ、親しく民衆に接したわが国の人々が等しく口にするのも、ロシアの人々の人の良さ、スラブ的鷹揚さといったものです。ロシアのいい意味での伝統は、こうしたところにも生きているのではないかと思います。／私の若い友人は、農村共同体を意味するロシア語のミールが、同時に平和を意味していることを教えてくれました。私はそこに、ロシア民族の伝統に根ざす、深い知恵を感じたものです。共同体意識が平和の基盤であることは、いうまでもありませんが、とくに世界平和実現のためには、人類全体の運命共同体意識が養われるかどうかはその鍵となるといえましょう。共同体意識と平和という意味を同時に含むロシア語のミールは、そのことを鋭く我々の前に提起しているようです。／私もまた貴国ソビエトを何回か訪問し、さまざまな人々に触れて感じたのは、大地に根ざした逞しい生活意欲と、それゆえにこそ平和を愛する心です」²²⁾。

池田先生によれば、ロシア思想史において暴力と非暴力をめぐる二つの価値が激しく対峙し、それらを分断する亀裂が底知れぬ深淵を見せている点で、レーニンとトルストイに勝るものはない。トルストイの無抵抗主義は徹底したものであった。帝政ロシアにおける社会悪を激しく攻撃し、国家、裁判、教会、私有財産を否定する。しかし、社会改革の方法は非暴力的であり、人間の道徳的回心に訴える。一方、レーニンはこうしたトルストイの無抵抗主義を徹底的に批判する。この妥協を許さない容赦なき裁断を貫くトーンは、革命で武力行使をためらわず、革命後の政権を擁護するためにテロや独裁を容認する姿勢につながっていく。「かくして、トルストイとレーニンの間に横たわる亀裂は、ロシアの詩人チュッチェフの『ロシアを物差しではかることはできない』との言葉を想起させるような、底知れぬ深淵をのぞかせている」。「同じロシアの歴史的現実への同情、怒りに発したトルストイとレーニンという二つの巨大な魂の噴出が、一方は非暴力、他方は暴力と両極端な対応をみせ、互いに歩み寄ろうとする気配さえなく、しかも両者の間に介在するギャップは、生々しい架橋作業などとうてい寄せつけないほど広く、深い一問題は、その悲劇性にある」。「両極端な現れ方をするロシア精神は、トルストイやレーニンのような優れた資質、天稟によってもなお、その両極性、極端性を払拭することができなかった、というよりも彼らが天才的であればあるほど、両極端に横たわるギャップが、抜き差しならぬ深淵として立ち現れてくるという、半ば宿命的な事実こそ留意されるべきである。そこに、人間精神のバランスをとる上で不可欠な“中庸感覚”と縁遠く“矛盾の国”“二律背反の国”であるロシアが伝統的に帯びている悲劇的なパラドックスがある」と語られるのである²³⁾。

4. ソビエト連邦の悲劇

1917年におけるロシア革命の指導者はレーニンであり、その後継者がスターリンである。レーニン思想をスターリンが解釈したマルクス・レーニン主義は、1930年代からソ連邦の国家イデオロギーとなった。マルクス・レーニン主義とは、ロシア革命の経験とレーニンの思想理論を核とするマルクス主義の潮流である。また、

マルクス主義はレーニンだけが正しく継承し発展させたとし、両者の思想の「同一性」を表現する用語である。これはボリシェビズム、共産主義とも呼ばれ、すべてスターリンの定式化によるレーニン思想の解釈である。スターリンによれば、マルクス・レーニン主義とは「帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義」であり、「一般的にはプロレタリア革命の理論と戦術」であり、「特殊的にはプロレタリアートの独裁の理論と戦術」である。スターリンによれば、レーニンは革命党を組織するにあたり、党の一般的な支持者と、党を日頃から意識的に支える組織活動者とを区別するべきであると考えた。労働者大衆の自然発生的意識の形成を待つのではなく、そこから独立した形態の前衛党組織構築を目指したのである²⁴⁾。

この点について、池田先生は次のように述べている。「ロシア革命の流れをみますと、あの『前衛』という考え方のなかに、すでに指導政党と民衆とを乖離させる萌芽がひそんでいたといっている。民衆以上に民衆の欲求を知っているとの前衛リーダーたちの自負は、いってみれば“理性の倨傲”にほかなりません。／人間とは何か—その可視・不可視の全体を、理性の物差しだけで推し量ることはできない。人間の内奥には、言葉にならぬ“沈黙の宇宙”が深く豊かに広がっているからです。それを理性の刃のみに頼って裁量すれば、そこに出現するのは、危険きわまる凶暴性を秘めたユートピア思想です。／民衆をリードせんとする前衛政党の自負や誇りは、“理性の倨傲”に骨がらみにされていたがゆえに、次第に鼻持ちならぬ独善と化し、民衆蔑視の特権意識へと変質をきたして“赤い貴族”の跋扈をもたらしました。啓蒙的合理主義の限界は、いろいろなところで指摘されていますが、ボリシェビズムも、その痛ましい事例の1つの特権意識と言えるかもしれません」²⁵⁾。

また、マルクス・レーニン主義が「『空想より科学へ』をいいながら、決定論的世界観を僭称することによって、擬似宗教へと堕してしまった」²⁶⁾として、次のように語っている。「その無神論としての世界観的な性格ゆえに、共産主義イデオロギーは神なき時代の“代替宗教”“擬似宗教”的役割を演じてきました。たとえば、『共産党宣言』が『プロレタリアは、革命においてくさりのほか失うべきものをもたない。われらが獲得するものは世界である』というとき、その極端に抽象化された画一・一律平等性から発信されてくるメッセージは、いうところの科学的イメージとはほど遠いメシア的な使命感です。／そこには、当初から、すなわち、窮乏化する一方のプロレタリアートを背景にして、その言葉が一定の妥当性をもち、革命の士気を鼓舞するエネルギー源たりえていたときから、特有の狂信とファナティズムの臭気が漂っています。しかもその臭気は、時代の推移とともに増大していきます。この狂信とファナティズムこそ、まさに憎悪や敵意の温床であり、世界宗教や普遍宗教の証ともいえるべき慈悲や愛とは、正反対の暗い情念であることは、申すまでもありません」²⁷⁾。

こうした誤ったユートピア思想は、ソ連に暮らす民衆を苦しめてきた。アイトマートフ氏の「父君トレクル・アイトマートフ氏は、1937年、当時吹き荒れていたスターリンによる粛清旋風に巻き込まれ、処刑されてしまいます。35歳の若さでした。／ちなみに、世界を震撼させた91年のソ連保守派のクーデターの直前、粛

清の犠牲者を葬った、ある秘密の場所が発見され、その中からトレクル・アイトマートフの名が入った紙が発見されて、54年ぶりに、不明だった父君の埋葬地が判明したという、衝撃的なエピソードもありました。／父が処刑された時、アイトマートフ氏は小学生で、筆舌に尽くせないほどの苦勞と辛い思いを味わったそうです。なにしろ、父親を政治的に疑わしい人物であると公的機関に密告し、銃殺に追いやった少年の行為が、公式に称賛されていた時代ですから」²⁸⁾。

池田先生によれば「ソ連邦の誕生から消滅にいたる74年間の意味するものは、一つの『理論』の破綻であり、『理念』の崩壊であり、『理想』の挫折である。ブレジンスキーは、その間の犠牲者を5千万人としているが、人によって3千万人という人もあれば、対談の相手アイトマートフ氏のように4千万人という人もある。じつに途方もない悲劇というしかない。しかも誰も正確な数字が分からないというところに、その悲劇性が倍増する。コミュニズムはナチズムと並んで、『イデオロギーの世紀』といわれた20世紀を思うがまま蹂躪した怪物として、消し去ることのできない傷跡を刻んでしまったのである。／マルクス・レーニン主義は、美しい、ある意味では完結した、人類史を一望のもとに収める壮大極まる『理論』であった。その革命的理論に導かれた革命的実践は、私有財産の廃止といい、農業の集団化といい、あるいは計画経済といい、当初の意図した通りの革命的成果を生むはずであった。歴史の必然的法則にのっとったプロレタリアートの勝利は、人類史を『前史』から真の『歴史』へと進歩させ、民衆のパラダイス、黄金時代を迎えるはずであった。その推進役である人間もまた、『理論』の間尺に合わせて作り直せるはずであるとして、猛烈な“学習”運動が繰り広げられた。間尺に合わない、また合わせようとしめない人間に対しては容赦なく“鉄の手”が襲いかかり、ソ連全土を“収容所群島”と化さしめた。美しい、壮大な『理論』と、醜悪きわまる『現実』との間には、そら恐ろしくなるほどの落差と深淵が横たわっている」²⁹⁾。

ソ連邦における「『理論』の破綻、『理念』の崩壊、『理想』の挫折は、いったいどこに起因するのであろうか。一言にしていえば、やはりその人間観の浅さ、誤りにあるといえるであろう。人間を“社会的諸関係の総体”とするこのイデオロギーは、ヨコには一種のグローバルな広がりをもったが、タテに一個の人間の生命、心的世界を掘り下げる視点となると、皆無に近い。というよりも、そうしたアプローチそのものを排してきた。とくに、宗教に対しては、激しい敵意を燃やしてきた。それがいかに人々の心を切り苛んできたかは、これまた、アイトマートフ氏が執拗に訴え続けて止まないところである」³⁰⁾と池田先生は論じたのである。

5. ペレストロイカの英断

1985年、ソ連共産党のチェルネンコ書記長が亡くなると、ミハイル・ゴルバチョフ氏がその後を継ぐことになる。ゴルバチョフ政権初期の中心課題は経済改革であった。主なスローガンは「加速化」であり、反アルコール・キャンペーンが代表的政策であった。1986年の第27回共産党大会では、「ペレストロイカ」の方針が

打ち出されている。ペレストロイカとはロシア語で「建て直し」「再編」などを意味しており、ソ連社会改革の合言葉として流行した。この年、ゴルバチョフ氏は「ペレストロイカは第二の革命である」と宣言する。これは単に経済だけでなく、社会生活全体の転換を意味するものであった。ペレストロイカはゴルバチョフ政権における第1のキーワードである³¹⁾。

池田先生はペレストロイカについてこう語る。「ゴルバチョフ大統領は、ペレストロイカは『革命』だといっています。それは、レーニンによるロシア革命以来、70年にして新たな革命を必要としている、ということでありましょう。……ゴルバチョフ大統領の唱導しておられる『革命』は、いわゆる“コスイギン改革”などが経済面などの部分的改革をめざしたのに対し、政治、経済、教育、文化などの万般にわたる壮大な企図をもっていることは、初めは半信半疑であった西側の人々の目にも、ようやく明らかになってきました。／私も、注意深くその推移を見守ってきましたが、やはり、ペレストロイカの成否を決定づけるのは“人間的要因”(人間的ファクター)ではないか、との確信をますます深めております。この考え方は人間が自己の人間革命を第一義に、社会の変革を志向しゆく我々の信条からみれば、よく理解できるところです。……ロシア革命70年の歴史をふりかえって『人間の意識』と『社会体制』の問題を、だれよりも考えておられる1人がゴルバチョフ大統領ではないのでしょうか。そこで私は、ゴルバチョフ大統領のいう『革命』は、社会総体の変革であることは当然ながら、その機軸をなすものは、人間自身の自己変革ということに帰着してくるのではないかと思います³²⁾。

ゴルバチョフ政権における2つ目のキーワードとして「グラスノスチ」が挙げられる。1986年に、衝撃的なチェルノブイリ原子力発電所の事故が発生する。これによりソ連の危機的状況が露呈し、ゴルバチョフ氏はグラスノスチに着手した。情報公開や公開制を意味するグラスノスチは、ペレストロイカのもとで展開された情報政策である。情報公開が推進され、ソ連社会の歪みや問題点さえ率直に語られるようになった。テレビ・ラジオ・新聞・雑誌といったメディアは活気づき、知識人の発言は日に日に大胆さを増していった。さまざまな社会運動も活況を呈し始めた。「歴史の見直し」も重視され、レーニンとロシア革命に対する根本的な見直しまで提起されるようになった。

グラスノスチについて池田先生はこう語る。「現在、経済改革などの面で悪戦苦闘を強いられているのに対し、ペレストロイカがもたらした成果として、万人が首肯せざるをえないのが、グラスノスチ(情報公開)であろうと思います。／ソ連時代を含むロシア1000年の歴史において、検閲制度の存在しなかった時代がかつてなかっただけに、そしてまた旧ソ連が、一切の言論を厳重な権力の統制下におき、イデオロギーの専制支配のもとでの秘密国家として君臨してきただけに、このグラスノスチの浸透は、分厚いカーテンを徐々に開け放ち、燦々たる陽光を招き寄せる“夜明け”として迎えられました。／初めは半信半疑であった人々も、あなたを中心にした当局の断固たる姿勢を知り、せきを切ったような言論の洪水現象が起こりました。その解放感にあふれた様は、旧来のソ連の暗いイメージを、一変させる効

果をもっていたといつてよいと思います」³³⁾。

ゴルバチョフ政権における3つ目のキーワードは「新思考外交」であろう。ゴルバチョフ氏は1986年の共産党書記長就任演説で、核戦争の脅威を強調した。1988年の第19回党協議会において、現代ではプロレタリア階級の利益よりも「全人類の価値」が優先するとし、これが「新しい政治思考の核心」と述べた。同年の第43回国連総会の演説では、新しい思考様式が求められており、それは全人類の価値を優先させる思想であると語った。この新思考外交は次のような結果をもたらしている。まず1985年に米ソ関係が改善され、1987年にはINF全廃条約が締結され、1989年には冷戦の終結が確認された。また1986年には「第三世界」から撤兵する方針が表明され、同年アフガニスタン、1987年にはモンゴルからの引き揚げが開始された。さらに1989年を中心に東欧諸国では社会主義体制が平和裏に転換され、1990年にはドイツが再統一され、ワルシャワ条約機構が1991年に崩壊した。こうした一連の政策が評価され、ゴルバチョフ氏は1990年度のノーベル平和賞を受賞している。

池田先生は新思考外交に関し、次のように述べている。「核兵器の登場により、国権の発動がそのまま人類絶滅につながりかねない状況下において、人類は否応なく国家の枠を超えて『国益』から『人類益』へ、『国家主権』から『人類主権』へと発想の転換を迫られています。／それだけに、ソ連大統領であったあなたが、世界政治の舞台において唱え実行した『人類的価値』優位の外交には、強い賛同の念を禁じえません。／あなたが指摘されているように、核兵器という人類共通の巨大な『ダモクレスの剣』の脅威は、決して過ぎ去ったわけではありません。さらに、核兵器に限らず、見方によっては核兵器以上の脅威である環境問題などにおいても、『全人類の価値』の優位ということは、人類にとって最優先の課題であるはず。／あなたのリーダーシップによって、現実政治において思い切った発想の転換がなされたという事実は、主権国家、民族国家にとらわれた『国家的価値』から『全人類の価値』への転換は可能である、との希望を抱かせるものとなりました」³⁴⁾。

ゴルバチョフ政権の下、ソ連の各共和国では1988年頃から民族運動が台頭していた。1990年には共和国ごとの選挙が実施され、いくつかの共和国では非共産政権が生まれている。共和国の下単位であった自治共和国を含め、各地で主権宣言・独立宣言の採択が相次いだ。1990年末から1991年に入り、ゴルバチョフ政権の意図やコントロールを超えた民族主義、分離主義勢力が台頭する。ゴルバチョフ氏は共和国に多くの権限を譲る連邦条約を締結することでソ連邦の維持を図ろうとした。ソ連邦維持派は危機感を強め、1991年8月のクーデターが引き起こされる。国家非常事態委員会は、健康問題を抱えるゴルバチョフに代わり、ヤナエフが大統領代行となって権力を掌握したと発表した。このクーデターは失敗し、ソ連共産党は解散され、各共和国で一斉に独立宣言が行われた。1991年12月にソ連の11共和国首脳は独立国家共同体の形成とソ連邦の存在停止を宣言する。ゴルバチョフ氏はソ連大統領の辞任を表明し、ソ連邦は消滅した。

ソ連邦の消滅に関し、池田先生はゴルバチョフ氏にこう語っている。「ベレストロイカを推進したあなたは、ロシアの民主化への過程で、ソ連共産党書記長という絶大な権限を有する自らの権力基盤を切り崩すかもしれないことを承知していながら、あえて“火中の栗”を拾おうとなされた。その勇氣は、万人が認めるところでしよう。……それにしても、ロシア革命以来、70年のボルシェビズムの歴史には、暴力やテロが母斑のように刻印されております。／その歴史を思うとき、必ずしもあなたの意にそったものではなかったかもしれませんが、『ソ連邦の崩壊』という20世紀でも最大級の出来事が、旧ユーゴのような最悪の事態を招くことなく、比較的平穏裏に推移したことは、今、振り返っても、ほとんど奇跡的といっても過言ではないと感じられます。／その大きな要因として、なんといっても、ミハイル・ゴルバチョフという人物の存在を挙げることに、誰も異論はないのではないでしょう。／後世の史家は、たとえばチェコのV・ハベル大統領が『ゴルバチョフは典型的官僚として、そのポストに就いたが、真の民主主義者としてそのポストを去った』と語った、その評言の正しさを立証するであろうと、私は信じております」³⁵⁾。

6. ロシア人民の「全人性」

ロシア人の民族性や独自性は、外から見ただけではよく分からない。第二次世界大戦中にイギリスのチャーチル首相は、ロシアについて「謎の、そのまた謎の謎」と表現したという。通常は温和でのんびりしているようでありながら、時には激情に走って奔放な行動をとる。大陸的でおおらか、粗野なところもあるが、芸術的な感性が豊かであり、繊細で緻密なところもある。その二面性には驚くべきものがあると言われる。また、ロシア人には伝統的に大きなものを好む傾向があること。ロシア人はど愛国心の強い民族もなく、その愛国心は泥臭く農民的であること。「タエマエ」と「ホンネ」を使い分けることなどが指摘されている³⁶⁾。

池田先生は、ロシア人の民族性についても各所で言及している。その中で、ロシア人に見られるスケールの大きさについて語っている。「貴国は人類史に多大な貢献を果たしてきました。科学技術だけでなく、文学や哲学の分野においても同じです。／私は青春時代から、トルストイ、ドストエフスキー、プーシキン、ゴーゴリ、ゴーリキー、ツルゲーネフ、チャーホフ、レールモントフら、ロシア文学に親しんできました。今でも心に刻んでいる多くの言葉があります。／また、この30年間、ゴルバチョフ元大統領や、モスクワ大学のホフロフ氏、ログノフ氏、サドヴニチ氏の3人の総長をはじめ、多くのロシアの方々と友情を結ぶことができました。セレブロフ博士もそうですが、ロシアの方々は皆、心が大きい。精神が深い。日本とはスケールが違います」³⁷⁾。

こうしたロシア人のスケールの大きさを象徴する人物として、池田先生はトルストイに言及する。「クリミヤで静養中だった文豪トルストイを訪ねたチャーホフも『途方もなく大きな人〈ジュピター〉、他の人間の上を天駆ける鷲』と書いています。まさに彼は、あらゆる意味で“途方もない人間”であつたと思われてなりませ

ん。文学史上に残した作家としての業績のみならず、青年時代のあの覇気と情熱と享楽の途方もなさ、しかもそれをねじ伏せようとする精神的膂力の途方もなさ、原始的生命へ還らんとするエネルギーの途方もなさ。そして、あなたも指摘さなったように、この世の政治的権力・宗教的権威といった支配機構に対して徹底して戦いを挑んだ、その反抗心の途方もなさ。82歳の高齢にしてなお、家を出て、どこまでも『道』を求めようとした、その途方もない心の若さ……。／トルストイという人間存在は、あらゆる意味で規格外であったといってもよい。この巨人の威容は、人間が矮小化しつつあるかに見える現代にあって、まさに一つの驚異であり、衝撃ではないでしょうか。大トルストイの途方もなき生の全体は、そのまま『人間復活』への永遠の揺籃たり得るのではないかと思います」³⁸⁾。

ロシア人の途方もない大きさについて、池田先生はこう語っている。「チュッチェフが『ロシアは普通の物差しでは測れない。ロシアは信ずる以外にない』』といっているように、私は、ロシアほど、こうした“常識”からかけ離れた国はないと思います。そうでなくして、『約束の地』をめざしてあの壮大なメシア的実験のために、あのような苦痛に満ちた境遇を甘受できるはずはありません。」³⁹⁾

そして池田先生は、ロシア人のもつ「全世界性」に論及する。プーシキン銅像除幕式でのドストエフスキーの有名な講演は、「プーシキンの精神に寄せて、『ロシア人の使命は、疑いもなく全ヨーロッパ的であり、全世界的』であること、したがって『全世界性こそわたしたちの運命』であり、それは『剣によってではなく、同胞主義と、全人類を結合しようとするわたしたちの同胞的志向の力によって獲得された』ことを訴えたものでした。……一番大切なことは、それによって引き起こされた1つの社会的“事件”ともいえるべき轟々たる反響にありました。彼の書簡によると、講演が終わったとき、聴衆は興奮し、知らない者同士までが互いに抱き合い、うれし泣きに泣きながら、“これから良い人間になろう、人を憎まず愛することにしよう”と口々に誓い合った。／2人の老人は、『われわれは20年間けんかして、お互いにもものも言わずにきたが、いま抱き合って和解したところです。われわれを仲直りさせてくれたのはあなただ。あなたはわれわれの聖人です。預言者です』とまで言ったそうです」⁴⁰⁾。

さらに池田先生は、ロシア人の独自性を「全人性」という言葉で表現していく。「以前から不思議に感じていたのですが、ソビエト史を生き抜いた人を見ると、一切の規範にとらわれない『無窮性』としかいいようのない大きさ、深さを感じるのです。／有名な映画監督タルコフスキーの作品には、汲めどもつきぬ無窮の哲学性があり、ブルガーコフやザミャチンら異端文学者の作品には、無窮の悲劇性があります。身近でいえば、私の友人である故ナターリア・サーツ女史には、限りなき温かさを感じます。そして、あなたには無窮の明るさが……。／この『無窮性』という言葉は、どこか深い次元で、ロシアの精神史を骨太に貫いている『全人性』という言葉と響きあっていると思います。圧制下にあつて、どんな歪んだ形ではあつても、否、歪んだ形であればあるほど先鋭的に『全人性』を映し出しているとはいえないでしょうか」⁴¹⁾。

そしてゴーリキーの『どん底』に登場するサーチンが、人間こそ真実だと語るシーンを通し、「無学な一庶民の口から語られる、世界の文学のなかでも屈指の“人間賛歌”です。私は、モスクワ大学での第一回目の講演『東西文化交流の新しい道』(1975年5月)で、この一節に言及しましたが、それというのもこのセリフこそ、ロシア精神史における『全人性』のもっとも端的な表白ではなかったか、と考えたからです。そして、こうした大らかな“人間賛歌”こそ、なべて現代文明が見失ってしまったすべての故郷ではないでしょうか⁴²⁾と池田先生は訴えたのである。

むすび

本稿では池田先生のソ連・ロシア論を、ロシア文学、ロシア思想、ソビエト連邦、ペレストロイカ、ロシア人民の5つに分析し考察してきた。19世紀のロシア文学は世界最高の水準に達した。池田先生はトルストイの『戦争と平和』『アンナ・カレニナ』、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』『悪霊』を中心に言及されている。池田先生によれば、ロシア文学の人間洞察は比類なく深い。19世紀のロシアでは思想の2大潮流が生まれた。西欧派は近代化を重視し、スラブ派は伝統を守ろうとする。両極性を持つロシア思想において、そこに横たわる亀裂は底知れぬ深淵をのぞかせていることを池田先生は指摘される。

20世紀のロシア革命を経て、ソビエト連邦が誕生する。国家イデオロギーとしてのマルクス・レーニン主義は擬似宗教に堕した。その誤った人間観が、池田先生によれば、ソ連時代のロシアを灰色に染めたのである。1980年代にはゴルバチョフ氏がペレストロイカに着手する。池田先生はゴルバチョフ氏の人間性を称え、その政策を支持された。この改革の成否を決定づけるのは人間的要因であった。結果としてソ連は消滅したが、ゴルバチョフ氏の功績は不滅であると池田先生は語られている。ロシア史を通じ、ロシア人はスケールが大きいことを池田先生は強調される。池田先生によれば、ロシア人民の「全世界性」「無窮性」は、ロシア精神史を貫く「全人性」と響き合うのである。

これまでの考察から、池田先生のソ連・ロシア観には以下の特徴を指摘することができるだろう。まず、ソ連・ロシアの人々との長年に亘る交流・対話の中で、この国の虚像ではなく実像を把握されている点があげられる。次に、ソ連・ロシアを一面的・部分的にではなく、多面的・総合的に認識されている点である。そして、ソ連・ロシアに対する肯定論でも否定論でもなく、バランスのとれた見方をされていること。さらに、ソ連・ロシアの政治や経済の制度よりも、その地に暮らす人間に焦点が当てられている。最後に、ソ連・ロシアに対する眼差しが慈愛に満ちている。このように、池田先生のソ連・ロシア観は、その人間観を基調とされているのであった。

池田先生のご覧になるロシアは、「全人性」の母なる大地と輝いている。

注

- 1) 2009年2月現在。ここでは以下の文献を参照した。『季刊 SGI』[特集：人間の世紀開く“精神のシルクロード”] 日蓮正宗国際センター，1990年秋季号；ウラジーミル・トローピン（斉藤えく子・江口満・道口幸恵訳）『出逢いの二十年—「世界市民」池田大作とロシア』潮出版社，1995年；中澤孝之『ゴルバチョフと池田大作—冷戦，ペレストロイカ，そして未来へ向けて』角川書店，2004年；『グラフ SGI』[特集 大地の心—ロシアと池田 SGI 会長] 聖教新聞社，2008年9月号；東洋哲学研究所編『世界市民 池田大作—識者が語る 平和行動と哲学』第三文明社，2008年。
- 2) ミハイル・S・ゴルバチョフ／池田大作『20世紀の精神の教訓(下)』潮出版社，1996年，9～10ページ。
- 3) 木村明生「日本人のロシア観・ロシア人の日本観」ユーラシア研究所編『情報総覧 現代のロシア』大空社，1998年，18～19ページ。日本人のソ連・ロシア観については、以下の文献も参照した。菊地昌典「日本人のロシア・ソ連観」菊地昌典編『ソビエト史研究入門』東京大学出版会，1976年；志水速雄『日本人はなぜソ連が嫌いか』山手書房，1979年（この書は、後に復刻版が出ている。同『日本人はなぜロシアが嫌いか』山手書房新社，1992年）；同『日本人のロシア・コンプレックス—その源流を探る』[中公新書] 中央公論社，1984年；和田春樹「日本人のロシア観—先生・敵・ともに苦しむ者—」藤原彰編『ロシアと日本—日ソ歴史学シンポジウム—』彩流社，1985年；外川継男「内村鑑三のロシア観」藤原，前掲『ロシアと日本』；中村喜和「石川啄木のロシア観」藤原，前掲『ロシアと日本』；Tsuyoshi Hasegawa, “Japanese Perception of the Soviet Union: 1960–1985”, *Acta Slavica Iaponica*, Tomus V, The Slavic Research Center, Hokkaido University, 1987；外川継男「日本におけるロシア研究」原暉之・外川継男編『スラブと日本』[講座スラブの世界 第8巻] 弘文堂，1995年；外川継男「福沢諭吉とロシア」北海道大学スラブ研究センター編『ロシア文化と日本：人の交流を中心として』[スラブ研究センター研究報告シリーズ No60] 北海道大学スラブ研究センター，1996年；拙稿「日本人のソ連・ロシア観—1986年～1993年—」『創価大学平和学会会報』創価大学平和学会，2000年；井手康仁／セルゲイ・E・タルノフスキー「日露間のイメージ・ギャップ」横手慎二編『現代東アジアと日本5 東アジアのロシア』慶應義塾大学出版会，2004年。
- 4) 木村，前掲「日本人のロシア観・ロシア人の日本観」20～21ページ。
- 5) 同上，21ページ。
- 6) ここでは以下の書を参照した。原卓也監修『世界の歴史と文化 ロシア』新潮社，1994年；木村汎編『もっと知りたいロシア』弘文堂，1995年；藤沼貴『ロシア・その歴史と心』第三文明社，1995年；藤本和貴夫編『ロシア学を学ぶ人のために』世界思想社，1996年；川端香男里ほか監修『[新版] ロシアを知る事典』平凡社，2004年。
- 7) 池田大作／アナトーリ・A・ログノフ『第三の虹の橋 人間と平和の探求』毎日新聞社，1987年，188～189ページ。
- 8) ヴィクトル・A・サドーフニチ／池田大作『学は光—文明と教育の未来を語る』潮出版社，2004年，19ページ。

- 9) 池田／ログノフ, 前掲『第三の虹の橋』51 ページ。
- 10) 池田大作／A・リハーノフ『子どもの世界—青少年に贈る哲学』第三文明社, 1998 年, 12 ページ。
- 11) 池田大作／C・アイトマートフ『大いなる魂の詩(下)』読売新聞社, 1992 年, 124 ～ 125 ページ。
- 12) 池田大作／C・アイトマートフ『大いなる魂の詩(上)』読売新聞社, 1992 年, 144 ～ 145 ページ。
- 13) 同上, 139 ～ 140 ページ。
- 14) 池田大作／ヴィクトル・A・サドーヴニチ『新しき人類を 新しき世界を—教育と社会を語る』潮出版社, 2002 年, 34 ページ。
- 15) 池田／リハーノフ, 前掲『子どもの世界』166 ページ。
- 16) 同上, 288 ページ。
- 17) サドーヴニチ／池田, 前掲『学は光』40 ～ 41 ページ。
- 18) 池田／アイトマートフ, 前掲『大いなる魂の詩(上)』220 ページ。
- 19) ミハイル・S・ゴルバチョフ／池田大作『20 世紀の精神の教訓(上)』潮出版社, 1996 年, 183 ページ。
- 20) ここでは次の書を参照した。V. ゼンコーフスキイ (高野雅之訳)『ロシア思想家とヨーロッパ—ロシア思想家のヨーロッパ文化批判—』現代思潮社, 1973 年; 山本新著, 神川正彦・吉澤五郎編『周辺文明論—欧化と土着』刀水書房, 1985 年; 『勝田吉太郎著作集第1巻 近代ロシア政治思想史(上)』ミネルヴァ書房, 1993 年; 『勝田吉太郎著作集第2巻 近代ロシア政治思想史(下)』ミネルヴァ書房, 1993 年; 聖心女子大学キリスト教文化研究所編『東欧・ロシア—文明の回廊』春秋社, 1994 年; セルゲイ・レヴィーツキイ (高野雅之訳)『ロシア精神史—哲学と社会思想の流れ—』早稲田大学出版部, 1994 年; 高野雅之『ロシア思想史—メシアニズムの系譜—〔新装版〕』早稲田大学出版部, 1998 年; 吉澤五郎『世界史の回廊—比較文明の視点—』世界思想社, 1999 年; 高橋誠一郎『欧化と国粹—日露の「文明開化」とドストエフスキー』刀水書房, 2002 年。
- 21) 池田／ログノフ, 前掲『第三の虹の橋』168 ～ 169 ページ。
- 22) 同上, 172 ～ 173 ページ。
- 23) 池田／アイトマートフ, 前掲『大いなる魂の詩(下)』88 ～ 94 ページ。
- 24) ここでは, 次の書を参照した。倉持俊一『世界現代史 29 ソ連現代史 I』山川出版社, 1980 年; パートランド・ラッセル (河合秀和訳)『ロシア共産主義』みすず書房, 1990 年; 和田春樹『歴史としての社会主義』〔岩波新書 (新赤版) 239〕岩波書店, 1992 年; 廣松渉ほか編『岩波思想・哲学事典』1998 年; 猪口孝ほか編『政治学事典』弘文堂, 2000 年; 西川正雄ほか編『角川世界史辞典』角川書店, 2001 年; 中西治『現代人間国際関係史 レーニンからプーチンまでとローズヴェルト, チャーチル』南窓社, 2003 年; 川端ほか, 前掲『ロシアを知る事典』; 土肥恒之『興亡の世界史 第14巻 ロシア・ロマノフ王朝の大地』講談社, 2007 年。
- 25) 池田／アイトマートフ, 前掲『大いなる魂の詩(上)』159 ～ 160 ページ。
- 26) サドーヴニチ／池田, 前掲『学は光』220 ページ。

- 27) ゴルバチョフ／池田, 前掲『20世紀の精神の教訓(下)』168～169ページ。
- 28) 池田／リハーノフ, 前掲『子どもの世界』146ページ。
- 29) 池田／アイトマートフ, 前掲『大いなる魂の詩(下)』311～312ページ。
- 30) 同上, 314ページ。
- 31) ここでは以下の文献を参照した。和田春樹『私が見たペレストロイカーゴルバチョフ時代のモスクワ』〔岩波新書(黄版)391〕岩波書店, 1987年; 下斗米伸夫『ソ連現代政治 第2版〕東京大学出版会, 1990年; 和田春樹『ペレストロイカ 成果と危機』〔岩波新書(新赤版)145〕岩波書店, 1990年; 下斗米伸夫『「ペレストロイカ」を越えて ゴルバチョフの革命』〔朝日選書428〕朝日新聞社, 1991年; 中西治『ソ連邦から共同体へ〕南窓社, 1992年; 下斗米伸夫『ロシア現代政治〕東京大学出版会, 1997年; 中澤, 前掲『ゴルバチョフと池田大作〕; 川端ほか, 前掲『〔新版〕ロシアを知る事典』。
- 32) 池田／アイトマートフ, 前掲『大いなる魂の詩(上)』148～150ページ。
- 33) ゴルバチョフ／池田, 前掲『20世紀の精神の教訓(上)』210～211ページ。
- 34) 同上, 243ページ。
- 35) 同上, 27～28ページ。
- 36) ここでは, 以下の書を参照した。木村汎『ソ連とロシア人—その発想と行動の読み方〕蒼洋社, 1980年; 森本良男『ソビエトとロシア〕〔講談社現代新書979〕講談社, 1989年; 袴田茂樹『ロシアのジレンマ—深層の社会力学〕筑摩書房, 1993年; 石川晃弘・塩川伸明・松里公孝編『講座スラブの世界 第4巻 スラブの社会〕弘文堂, 1994年; 廣岡正久『ロシアを読み解く〕〔講談社現代新書1255〕講談社, 1995年; 原暉之・山内昌之編『講座スラブの世界 第2巻 スラブの民族〕弘文堂, 1995年。
- 37) 池田大作／アレクサンドル・セレブロフ『宇宙と地球と人間〕潮出版社, 2004年, 352～353ページ。
- 38) 池田／アイトマートフ, 前掲『大いなる魂の詩(下)』9～10ページ。
- 39) ゴルバチョフ／池田, 前掲『20世紀の精神の教訓(下)』202～203ページ。
- 40) ゴルバチョフ／池田, 前掲『20世紀の精神の教訓(上)』300～301ページ。
- 41) ゴルバチョフ／池田, 前掲『20世紀の精神の教訓(下)』195～196ページ。
- 42) 同上, 196～197ページ。